

No. 49	昭和58年12月20日 発行 編集： 後 藤 光 男 〒591 堺市百舌鳥西之町1丁98-2 阪南住宅1号棟116号 電話： (0722) 57局7009番
<h1>ねじればね</h1>	発行： 日本甲虫学会 〒658 神戸市東灘区御影山手2丁目19-8 大倉正文方 電話： (078) 811局2706番 郵便振替口座 大阪9-39672番
December, 1983	

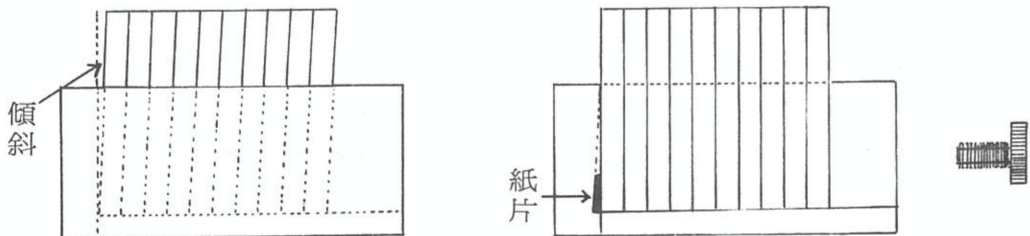
ラベル印刷のあれこれ 追補(7)

後 藤 光 男

(U)

ラベル印刷で書き落したことがあるので追記する。それは活字押器の内壁の欠陥である。あってはならないことなのだが、生産の最後の仕上げで検査の見落としと思われる。活字押器の内面の角度はすべて直角90度であるべきだが、版組を終えネジを締めた時に横から見て、組版が右か左に傾いている場合がある。これはネジ部の反対側の内壁面が上方か下方かのどちらかで、一方の厚味がごく僅か違う場合に生じる。

このような活字押器は購入の時では仲々発見できなくて、組版の過程で見付ける結果となるが、下図の方法によって印刷面の修正ができる。傾斜したままでも印刷はできるが、その印刷面は組版がごく僅かに傾斜しているので、左右どちらかが欠けて印刷される。また活字自体も片減りとなって、他の組版でも同じような結果となるので、この方法を是非おすすめしておきたい。



内面壁上部が厚いため組版は右に傾く、また下部が厚い場合は左に傾く。これを防ぐには内面壁の三分の一の紙片を下部または上部に入れると、組版の傾斜は修正できる。(図は右傾を示したものである)

簡単な「微小昆虫・抽出装置」の作り方

後 藤 光 男

この装置 Berlese Funnel については沢田高平氏によって紹介（本誌第2号、1956）されており、材料の落葉が混じる腐葉土を篩り携帯用フルイについては私が紹介（本誌第13号、1962）した。私の使用していた本体は屋外に放置していた油断から、すっかり錆びついてしまって使用ができなくなったので、新調を考えた。しかし既製品は市販されていないから、扱い易い設計で作らせたら、どの位の価格だろうかを沢田氏に問合せた。そのご返事は、一般向でなくまたかなり手間仕事であるため、相当高額になるでしょうとのことであった。私自身強いて必要を感じていないから、廃物利用でと考えた。

専門に微小生物を抽出するのなら、容器の周囲がタンクになっていて、湯温で周りから熱源で上方から温める構造のようである。私は落葉中の極小甲虫位までを対象としているから、適温で落下すれば事足りるので、電球熱源だけで試作してみた。

材 料

1. 砂糖の空罐 フタ（径24 ㎝、高さ21 ㎝）底（内径23.5 ㎝、高さ25.5 ㎝）のもので、外寸は径24 ㎝、高さ26 ㎝の罐である。 1 ヶ
2. 洗面器 （アルマイト製、径30 ㎝、高さ8.5 ㎝）落下甲虫の受皿用 1 枚
3. 針 金 （#12~8）80 種
4. 金 あ み （1 ㎝亀甲紋、90 ㎝巾、1 米につき430 円） 25 平方㎝
5. そ の 他 ソケット（固定型）、中間スイッチ、差込キャップ、電球（20~60W）を各1 ヶとコード80 ㎝、絶縁用板切 14.5×9.0×1.5 ㎝

作 り 方

- イ. 罐底部の内径に合せて針金を丸め輪を作り、拡がらないよう端で留めておく。
- ロ. 針金輪に金網をしっかりと餅焼網のように取りつける。
- ハ. 罐の底を罐切で切抜く（金網が落ちないように四方を1 ㎝巾で切り残してもよい）。
- ニ. フタの中央3分の1位にコードの引込み穴をあける。
- ホ. フタの裏側中央に絶縁用板切の位置を決め、表側よりビスで固定する。
- ヘ. フタの穴にコードを通して外側は差込キャップに、内側は固定型ソケットに接続し、ソケットを絶縁用板切に固定する（中間スイッチが必要であれば、使用に便な位置にセットする）
- ト. 本体に脚がないので、受皿代用の洗面器にのせて仕上りとなる。

使い方と注意 フルイで篩った腐葉土を金あみの上に1~2 ㎝位平均に置いて、電灯を灯もす。腐葉土が燃せられて中に潜む生物が暑さから逃れようと下にもぐり、金あみを通して洗面器に落下する。必要な甲虫類のみ管瓶へ拾いあげる。

野外ではあまり我々の目に触れないが、腐葉土の中にはいろいろの生物に混ってダニ類が数多く生息している。これを使って初めて、この実態を知る訳だが、人体を加害しないダニも多いかも知れないが、ひどい目に会うこともあるので、居室内での使用はあまりお勧めできない。しかし一般の採集法ではまったく網にすることができない甲虫類を容易に採集できるので、仲々捨てがたいと思っている。

新 入 会 員



住 所 変 更



死 去



認 定 退 会



(D) ...

「昆虫学評論」バックナンバー価格表

当会々報のバックナンバーの価格は下記のとおりです。なお、各巻の1号または2号の分冊売りはいたしません。この価格表は昭和59年3月末日までのものです。

第1巻第1号、第2号および第4巻第2号		全部で	300円
第6～10巻	各巻はそれぞれ1,000円	"	5,000円
第11～15巻	" 1,500円	"	7,500円
第16～20巻	" 1,500円	"	7,500円
第21～25巻	" 2,000円	"	10,000円
第26～30巻	" 2,500円	"	12,500円
(ただし、第30巻のみ購入の場合は3,000円)			
第31～35巻	" 3,000円	"	15,000円
第36～38巻	" 4,000円	"	12,000円

総目録：第1～10巻、第11～15巻、第16～20巻、第21～25巻、第26～30巻、第31～35巻をそれぞれまとめて購入される場合は、それに該当する総目録は無料で差しあげます。

なお、当該巻目録のみ希望の場合はそれぞれ200円、全部で1,200円です。

送料はすべて無料(学会で負担)です。ご希望のご照会は大倉までお願いします。

「ねじればね」の全号が揃います

本誌「ねじればね」は26号までが更半紙で27号より上質白厚紙となりましたが、印刷部数が「昆虫学評論」の発送部数を少しく上廻る程度しか印刷しておりませんので、最近号を除いてほとんど絶版です。一部の方々の要望によって絶版号の複写をして全号揃えています(原本の在庫がある号は原本)。複写号数によって単価が違います。また各種ラベル類43:12; 専用台紙47:5; 4.5P活字セット34:12; 35:7; 36:8に掲載しています。評論以外については後藤までご照会下さい。

第39巻会費の値上げとご納入のお願い

「昆虫学評論」第38巻はご覧のような大冊になり、大変な赤字になりました。やむを得ず、第39巻から年額5,000円に値上げさせていただきます。

何卒事情ご賢察のうえ、同封の郵便振替用紙にてなるべくお早い目に、ご納入下さるようお願い申し上げます。

— あ と が き —

前号でお知らせしていました大冊1年1巻の目的は達成しましたが、「天は二物を与えず」の諺どおり、もっとも肝心なものが欠けたようです。異常天候のためかは知りませんが、世間が騒然とした中に今年も暮れてゆきます。月日の経つのは早いもので、評論を2冊出せば新年を迎えるというサイクルを、来年から定着させたいものです。

健やかなお正月を迎えられるよう希っています。(G)